

---

+ BURNING BLOOD +

蜜柑 汁洲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

+ BURNING BLOOD +

### 【Nコード】

N7462Y

### 【作者名】

蜜柑 汁洲

### 【あらすじ】

物語の舞台となるのは、今より十数年…或いは数十年後の地球。時間という大樹から枝葉のように無数に分かれて伸びていく未来の中の一つ。

人類滅亡の危機に瀕し、多くの人々が遠く届かない憧れを抱いていた超能力を持ってしまつと人々は何を成すのか。

超能力を希望と慈愛に溢れた人類再興への光の道しるべとするのか。はたまた

超能力を絶望と怒りに満ちた人類滅亡の崖道への片道キップとする



## 000 諸注意事項

物語の舞台となるのは、今より十数年…或いは数十年後の地球。時間という大樹から枝葉のように無数に分かれて伸びていく未来の中の一つ。

人類滅亡の危機に瀕し、多くの人々が遠く届かない憧れを抱いていた超能力を持ってしまつと人々は何を成すのか。

超能力を希望と慈愛に溢れた人類再興への光の道しるべとするのか。はたまた

超能力を絶望と怒りに満ちた人類滅亡の崖道への片道キップとするのか。

幻想の中の決して届かないと思われた力を手にした時、人類はどんな方向へ歩み始めるのか。

これはそんなifの物語……

はい！とまあまずはさておき第0話ですよ、皆様。

初めてのの方も初めてじゃない方もこんにちは、いらっしやいませ、よろしく願います。

作者の蜜柑ミカン 汁洲ジュウスと申します。

えー私の自己紹介といいますが、今後の更新頻度のことと先に言い訳をさせていただきたいのですが、私は現在専門学校生です。

課題が忙しかったりするので更新は不定期まつたり更新になると思うのですが、無理しない程度にはがんばります。

さてさて、諸注意なんですけど…まあ のあらすじを読んだだけじゃなんじゃこりゃー！って思う方はかりですよー！。

ククク、計算通り(ニヤツ というのは実にどうでもいいことで、実際はちよつとでも興味を引いて中を見ていただければなあと

いづあざとい思考によるものです。

なので、今ここまで読み進めているアナタはまず私に引っかけたということになります、感謝感謝です。

で、肝心な内容なんです、まず一番重要な設定が隕石が地球に落つこちた！というものです。

単純ですが、ここがこの話のキモになるので抑えておいてほしいです。

あとはそこから話が広がっていくのでそこさえ押さえてもらえればなんとかなるかと思えます。

これ以上はちょっとお話しすることは出来ない、これはこの辺で。

視点の方は基本的に第三者視点でいこうと思っています。

ただ、作中でAルートを進む方とBルートを進む方で切り替えをする予定です。

切り替えをして投稿する時はサブタイにその旨を書くのでよろしくおねがいします。

今の段階ではとくにこれといった諸注意は無いので、これにて第0話をメらせていただきますが、このページの変更が行われた時は最新話のあとがきに変更の旨を記載しておきます。

それでは皆様ごゆるりと気楽に読み進めていって下され〜

## 001 プロローグ

現在、地球は異常気象や動物の突然変異、絶滅、生態系の変化などの問題に追われていた。

今まで何十年にも渡って調査してきていた地球に関するデータなどは意味をなさなくなることもしばしばであった。

科学者たちは現在の状況を解明しようと大忙しで駆け回り、政治家たちは国民の混乱を防ぐために様々な政策を発表したりして奮闘していた。

そしてそれは世界各国のどのような場所でも行われていた。

この混乱の原因を全ての元へと辿っていくと、一つの大事件につきあたることとなる。

それが俗に『隕石漂着』と言われるものだった。

この『隕石漂着』を最も早く予期していたのはNASA航空宇宙局の科学者たちだった。

予期していたと言っても、実際はNASAの科学者たちが予期していたのは小惑星との衝突による地球全域を巻き込んだ地球滅亡であって、厳密に言うと『隕石漂着』のことではなかった。

しかし、もちろん隕石が地球に来て、人類に大規模な損害をもたらしたのは言うまでもないことだ。

隕石漂着による余波で大津波や、プレートの変位による地震が頻発するようになり、二次、三次などを合わせた様々な災害によって人類の約5分の3が犠牲になった。

それでも、隕石の落下による地球の瓦解などの地球滅亡の危機は起きなかったし、何百メートルもあるような超巨大津波で世界が沈むことはなかった。

どういうことか、その隕石は軽石みたいになんかスカスカになっており、一見した見た目よりも質量はかなり軽く、落下地点が海だった

ために落下の威力が津波となつて落下時の衝撃を分散したおかげで被害が地球滅亡レベルまでに及ぶということは無かつた。

もちろん落下地点の近くに住んでいた人々には津波などで甚大な被害が出たので、手放しに喜べる状況では無かつたのは確かだつた。

そして、驚くべきことにその隕石は衝突による衝撃で海底山と結びつき、新しい島を形成した。

『カラミティアイランド』と呼ばれるようになったその新しい島は、それから特に動きを見せることも無く地球の一部として馴染んでいった。

しかし、それらよりもつと凶悪な、全世界に被害をもたらすようなものがその隕石にはあつた。

それが放射性物質『アビリタイト』と後に呼ばれるようになる、濁つたエメラルドのような輝きを発する物質だつた。

地球のどの物質にも当てはまらないそれは、その放射性物質がもつある特性から取つて後の世でそうよばれるようになったが、落下当初は『災いのもと』『死の岩』『不幸の結晶』などと呼ばれて恐れられた。

隕石の落下によつて、そこから海に流れ出したその放射能は海流に乗つて、または風に乗つて全世界へと散つていき、世界各地に放射能をまき散らした。

そのため全世界では人間に限らず、生物であれば奇形や、突然変異などを起こしてしまい、もともと少なかった動物達の一部は絶滅したり、変化したせいで生態系の変化が起こつてしまつたりと、急激な生態系の変化が起きた。

人間も放射能の影響を受けたために発癌、急性白血病、白内障などの被害を受け、生まれてくる子どもたちは奇形児だつたり、精神障害を持つていたりもした。

これらが世界各国で起こつてしまつたため、各国はこの人類に対する危機のために洪々ながらも手を取り合い、資源や機材を出し合つて除線をしたり、『カラミティアイランド』を中心とする放射能遮

断のためのドーム型の隔壁のようなものを作るなどの対策をとった。このドームのお陰で放射能は漏れなくなり人類は助かったものの、隕石の周りは人が住むことが不可能なほど汚染されたので一般人立ち入り禁止として、上空を旅客機が飛ぶことも禁止した。ドームに囲まれたカラミティ島の管理は、宇宙からの未知の物質を狙って各国が欲しがらせるいで所有権を決めることができないために、各国の混成チームが編成されて管理をすることになった。そうして、人類は多大なる被害を受けながらも時間をかけて再び立ち上がることになんとか成功していった。時間は少々かかったがこれで元の生活に戻れると思い、それぞれが元の生活へと戻っていく時だった。

事件から7年たった冬の夜、隕石漂着のせいで人口が激減し、第二アメリカ合衆国として再生した旧ニューヨークにある寂れたデパートで、人質立てこもり事件が起こった。犯人によって人質としてとらえられたのは32歳の母と11歳の男児で、その二人は休日買い物にきていただけの平凡な家族の一員だった。

父親も二人とともにデパートへ来ていたが少ない物資を多く集めるために別行動をしており、何が何やら分からないうちに避難をさせられた時には、既に二人は人質としてとらえられていた。

そして視聴者がほとんどいなくなり一局しか映らなくなったTVでは、警察による交渉の失敗、狙撃チームによる犯人狙撃作戦の実行の様子をリアルタイムで報道していた。

警察の狙撃犯チームの中でも最も優秀な狙撃手によって、銃口からマズルフラッシュとともに飛びだした弾丸は寸分の狂いもなく犯人の頭部を貫通し、一瞬で意識を刈り取った。

しかし、犯人が倒れていくときにトリガーに指が引っ掛かったままだったのか、母親のこめかみに突き付けられていた銃は跳ね上がりながらトリガーを引かれ、母親の即頭部に銃弾を撃ち込んだ。

犯人に次いでその場に崩れ去る母親を見た少年は、愕然とした面持ちで母親の死に顔を見つめ、そして理解をしたときに悲痛な叫び声を分厚い雲がたちこめる空に放った。

テレビの向こう側にいる数少ない人も、現場にいた様々な立場の人も、そして少年の父親も視線を落として、涙をこらえた。

そして、それから初めに異変に気付いたのは現場の警察官だった。いつまでもただただじっとしているわけには行かないと思ったのか、少年のところに行つて、安全な場所まで連れて行こうと近くまで駆け寄ったその時に、警官は叫んでいた少年がいつのまにか俯きながらボソボソと何か声を発していることに気付いた。

一体なにごとだろうと訝しんだ警察官だったが、母親が目の前で死んだなら受け入れがたいこともあるだろうと思ひ納得して、そのまま駆け寄つて少年を連れて行こうと少年の手をとった。

しかし、その警官の体が突如として灼熱の炎に包まれて一瞬のうちに消し炭となった。

あまりの突然の展開に全ての人が呆然とする中で少年の体も、周りの空気さえも焦がす灼熱の炎で包まれていく。

一際大きな炎に包まれ、熱風をあたりにまき散らしたかと思うと、その少年は炎の中で言葉にならない怨嗟の声で吠え、近くにいた警官隊の中へと飛び込んだ。

高温の炎に焼かれて次々と消し済みになっていく警察官たちは、炎の奥にちらちらと見え隠れする少年の姿に撃つことを一瞬躊躇い、その間に炎に身を焼かれていった。

少年の父親はまわりの制止をふりほどいて、少年をなんとか止めようと近づいたが、その手は無情にも少年に届く前に炭と化し、地面へ崩れ去っていった。

報道を見ていた人々は愕然とし、あるいは呆然としてニュースを食い入るようにつめていた。

そして、ニュースは機材が熱にやられて壊れるまで続き、その少年の暴れる様が米国全土にあますことなく伝えられた。

その後散々暴れまわった少年は力を使いきったのか、糸が切れたかのように唐突にその場に倒れこみ、すぐさま特殊部隊の手によつて拘束され、強力な睡眠薬を打たれた上で連行された。

旧ニューヨークの街の一角は戦場になつたように焼け焦げ、壊れたがすぐにあたり一帯が封鎖されることになり、報道関係者の接近も許されない一切立ち入ることが出来ない厳戒態勢がしかれた。

報道番組では先ほどまで写されていた映像を元に専門家などを電話するなどをして、さきほどまでの映像の解析を進めていたが、そのどれもが宇宙人や、合成映像などと様々な憶測を飛ばせていた。

一方そのころ、件の少年を保護：拘束した特殊部隊の面々は、頭にハテナマークを浮かべながら何故即時射殺をしなかつたのだろうかと思つていた。

通常ならば警官を何人も殺してしまうと即時射殺命令が下されるはずなのだ。

しかし、上官の『生かしたまま連行せよ』という命令は絶対だとし、今は眠れる少年の様子をこわごわとみていた。

少年の寝顔は年相応のあどけないもので、強力な睡眠剤を打たれたせいでピクリとも動かないその様は一見死んでいるようにも見える。しかし、その実態は不可思議な能力を使つて現場にいた警察官を皆殺しにした凶悪な犯人。

少年の様子を監視している特殊部隊の人間は恐怖をおぼえることはあつても、少年にかわいらしさを覚えることは無かつた。

その後、さらなる上官の命令で行き先を変更した車は、秘密の通路を使つて軍の秘密研究所：通称：SSRF (Seventh Secret Research Facility) と呼ばれる『第七秘密研究施設』へと向かう。

施設に着いた隊員は少年を嚴重に拘束したまま車から降ろすと、救急で患者を運ぶような台車の上に拘束具を取り付けたものに少年を拘束しなおして研究所の中へと運びこんだ。

隊員に課せられた仕事はここまでで、その後の少年のことは施設に

いる研究員に引き継がれる。

少年の意識が戻ったあとは研究員によってしばらく尋問が続き、そして初めこそ人道的な少年の意思による協力の研究が進められていたが、次第に研究は苛烈していき、最終的には少年の意思を無視した非人道的な研究が進められていくことになる。

研究員たちにとってはその少年はもはや興味深い研究対象としか目に映らなくなり、両親も既に死んだ少年は引き取り手のいない都合のいいモルモットでしかなかった。

そして非人道的な研究が積み重なった結果、拷問にも似た研究が終わることを望んでただただ我慢していた少年はついに自分の舌を噛み切って死んだ。

研究員たちがその様子を見て最初に言ったのは「しまった。自殺防止用に轡でもかませておくんだった。生きた貴重な素材がなくなってしまった」であった。

研究結果が整えられ、SSRFからあがってきた極秘報告書を読んだ当時の大統領は、全米生中継によって全国民の知ることとなった事件の真相を公表することを決定した。

その日、大統領は「現在、世界には超能力と呼ばれるような力を使う、いわゆる『能力者』が現実的な脅威として存在します。」と、全世界へと『能力者』というものの存在を公表した。

その日から『アビリター』と呼ばれる能力者達の地獄の日々が始まった。

## 001 プロローグ（後書き）

つと、まずは導入部分のプロローグでございます。色々と設定が出てきているので、ココをある程度抑えておいてくれれば後の話がスムーズになると思います。

あ、それと、誤字指摘、質問などは感想欄に書いていただければ修正、返信するつもりですが、批判的な意見だったり、明らかな荒らしとみなした場合は削除したりもします。

## 002 Contaminated World

アカシバゴウキ  
赤司波剛毅は、両親を生まれてから直ぐに失うことになった孤児の一人だった。

隕石漂着のために父と母が多量に放射能を被ばくし、そのせいで患った癌のために剛毅が3歳の誕生日を迎える直前に死を迎えることとなった。

両親は幼い剛毅を残して死ぬことに涙を流しながら悔み、剛毅のその後の成長を親戚に託した。

しかし、その親戚は最初こそ普通に育てていたものの、自分の子供でもない剛毅を育てていくことに次第にストレスを覚え始め、剛毅が11歳になった時に剛毅を連れて海外旅行に行き、僅かなお金と食料を持たせてそのままおきざりにして帰った。

当時は隕石漂着の影響があとを引く食料不足や、失職による貧困で、子供を捨てるということは珍しくなく、一応国が禁止をしているものの後が絶たなかった。

経済の結びつきが強かった国との交通は比較的早く安定し、渡航料金も国家間の経済復興のために震災特別料金で通常よりも安めに設定されていたのもその一因だったのかもしれない。

国内にそのまま捨てられることも多かったが、国が負担する養育費用削減のため震災孤児の親を見つける方針がとられており、捨てたとしても親のもとに帰ってくるが多かったのも海外に捨てられる要因になった一部だろうと考えられる。

かくして11歳という幼さで海外に一人捨てられた剛毅は、容赦のない厳しい環境の中で砂と埃にまみれて育っていくことになった。

そして見知らぬ土地に捨てられてから1年が経ち、当初持っていたお金もつくに全て使い果たした剛毅は子供なので当然働くことも出来ず、空腹も限界に近付いていたこともあってホテルの裏手で自分と同じような子供が、廃棄された食べ物の袋を漁っているのを見てふらふらと近づいていった。

「どっかいけ！これは俺のだ！それ以上近づくならぶっ殺してやる」

相手の少年は、自分と同じような子供が近づいてきたのを見て、自分の貴重な食料が奪われると思ったのか、刃が錆びついたカッターを取り出して剛毅に威嚇してくる。

その少年の剣幕を見て気圧された剛毅はそのまま後ずさり、背を向けて歩いてきた通路を走って引き返した。

しかし、その走りも空腹のために次第に力を無くしていき、剛毅は薄汚れた裏路地の壁に手をつけて力なく息を吐き出す。

このまま何も食べられずに飢えて死ぬのだろうか…と考えた剛毅の背後から細長く伸びた影が差した。

いきなり差した影に何だろうと思いつつもそちらへゆっくりと目を向けると、路地の入口で片手に缶づめが入った袋を持った少年が立っていた。

その少年は、剛毅の痩せた体とやつれた表情を見るとおもむろに剛毅の方へと近づいていき、袋の中から缶詰めを取り出すと缶のふたをあけて剛毅に手渡した。

「腹へってんだろ、お前。コレ食べよ」

剛毅はもらった缶詰めと少年の顔を交互に見たあと、空腹に耐えかねて缶詰めにかつついた。

SPAM缶の油っこくて濃い味が口の中に広がると、空腹だった剛毅はそれだけで幸福をかみしめているように思え、もっと食べたいと思つて缶の中に残っていた残りの肉を直ぐにペロリと平らげた。

「良い食いつぶりだな、お前。それにお前……。ん、いや……。まあいいか。……。よし、気にいった。こんなところにいたってことは、どうせ一人で行くところもないんだろ？ ついてこいよ、ここよりは多少はマシなところにつれてつてやる」

そういつた少年はくるりと剛毅に背を向けて路地の奥の方へと歩き出す。

ここよりも多少はマシな場所があると聞いた剛毅は、自分に背を向けてさっさと歩いていく少年の後を追うようにふらふらとついていた。

「帰つたぞ、皆。今日は一人新人を拾つてきたんだ。皆仲良くしてやつてくれ」

路地の奥へと進んでいつた少年は、工場跡地のようなところへ破れた金網の隙間を通つて入つていき、錆びついたドアを音を立てながら開いた。

ドアの向こうから剛毅の目に飛び込んできたのは自分と同じぐらいの年に見える少年や少女3人ほどが室内で遊んでいる光景だった。

「ギルバート今日はちょっと遅かったねー。また寄り道してたのー

「？」

「いや、話きいてたか？ユリア。今日は新人を一人連れ帰ったんだって今言っただろ」

「そっかそっかー。あれ？そっちの子は誰？」

「だから！俺が連れ帰ったんだよ！」

「あははー、ごめんねー」

「ぐう…いつもどおりマイペースな奴め…」

剛毅の前でたつた今起こった寸劇によると、剛毅を連れてきた少年がギルバートというらしく、ギルバートの姿を見て駆け寄ってきて話をしていた天然がはいった少女がユリアという名前の持ち主だということが分かる。

ユリアはこの工場跡地にすることが場違いな様な、キレイに整えられた明るいブラウンヘアの少女で、顔は可愛らしく、万人に愛されるような笑顔を持つ子だった。

「遅いわよ、ギルバート！あんたが寄り道する癖があるのは分かるけど、最近はアビリター狩りが行われてるって噂なんだから……。ただでさえあの事件の子と同じ年の子は怪しいって思われてるのに……」

「わかってる、シェイラ。わざわざ心配かけて悪かったな」

遅れてやってきたのは磨けば光るだろうが、汚れなどでくすんだブロンドヘアをポニーテールにしている活発そうな少女だったが、

今は少しだけ心配だという雰囲気がいじみ出ている。

「！心配なんかしてないわよ！あんたが連れていかれたら食料が無くなるから言っただけよ！」

照れ隠しにガツと見事なボディブローを決めたシェイラという少女はちょっと離れた位置にあった壊れかけのソファにムスツとした雰囲気腰掛けた。

「グツ……。いいボディブロー……。だツ……。！」

「いい加減学習したらどうだ。お前もシェイラの気持ちには気づいているんだろうに……」

「お、ティードか。いやいや、ああいう反応をするのがまたアイツの可愛いところであってだな……」

「俺としてはいちいちサンドバックになるまでの意味が見出せないな……」

シェイラの綺麗に決まったボディブローを受けて膝をついたギルバートの横では、いつのまにか来ていたティードという少年があきれた感じでギルバートと話をしていた。

ティードは黒髪で端正な顔の中に切れ長の目を持った少年で、どことなく近づきたいような雰囲気を出している節があった。

ティードは、やれやれ……といった感じで肩をすくめて壁の方へ歩いていくと、壁に背中を預けて寄りかかると腕を組んで目を瞑った。

自分のことを置いてきぼりで次々と進んでいく展開に、さすがの剛毅も口を開こうとするとそれを察したのかギルバートが先に声を上

げた。

「おっと、悪い悪い。さてさて話の本題だが、今日は面白そうな子を一人見つけたので連れてきた。たぶん今日からここに住むから皆よろしくな」

パンパンと2回手をたたいたギルバートは注目を集めたのを周りを見わたして確認してから口を開き、とても軽い口調でさらりと剛毅の今後にもかかわることを発表した。

「ええ！？ちよっと！いくらなんでもイキナリすぎるでしょ！なんとなく想像はできてたけど……！」

「……。ギルバートが面白そう……か。なるほどな……」

「わあ〜よろしくね〜。新しい能力者さんだね〜」

「お！ユリアがそういうってことはやっぱりアビリターだったかー！連れてきて正解だったな！」

「ええ！？ちよっとアビリターってどういうことよ！？」

一人状況を理解していないシェイラが驚きの声をあげるが、他の3人はと言えばやっぱりそうだったかーという反応であり、シェイラだけが理解が追い付いていない状況だ。

「あ、あの……。僕がアビリターってどういうことなんですか…？」

突然過ぎる展開についていけなくなったのかやっと口を開いた剛毅はギルバートへとおずおずと尋ねる。

「おお？そうかそうか……。まだ発症前か。それなら知らなくても仕方ないわな、うん。お前な。能力者なんだよ。お前も知らなかったんだろうけどな。俺は勘でお前が能力者っぽいつて思ったから連れてきただけだったんだけど、ユリアが言うなら間違いない。お前は能力者だ」

「まさか……。？僕が…アビリター……。？」

「そうだ。お前は能力者。まあここにいる全員が能力者なんだが、ユリアは他人の能力が見える能力者なんだ。だから、お前が能力者だというのは間違いない。能力がないと思ってるかもしれないけど、まだ開花してないだけだ」

まさか自分が能力者だなんて思ってもみなかった剛毅は驚愕の事実を告げられて呆然と自分の両手の平を見つめた。

しかし、当然それは何も変わっていない普通どおりの様子でも能力という『異常』が体に起こっているとはとても考えられない。通常、能力という『異常事態』が体に起こると体のどこかしらに影響が出るらしく、能力者といわれるアビリターの体の一部には、色素異常だったり、奇形だったりという部分が目に見える形として現れることが多い。

そのため、剛毅は自分がアビリターであるということにはわかには信じられなかった。

「ん〜たしかに目に見える範囲には異常は見られないな、うん。まあそのうち見つかるだろうし、その時でいいんじゃないか？」

剛毅の服をまくったりして足や背中とかも見たギルバートは、それ

らの場所に異常が見られなかったことを少し不思議に思ったが、そのうち分かるだろうと思ひ、気楽に考えた。

ちなみに俺はここにそれっぽいのが有ると言いつつ、下半身のどこかにあるのか、ズボンを脱ぎ始めたギルバートをシェイラが顔を赤くしてはたいた。

「ててて…。まあそれよりもだ。お前もさっきシェイラの話聞いてただろう？ 数年前の旧ニューヨークの事件が発端でアビリター狩りが行われてるって話だ。当時の少年と同年代だっただけでアビリターって思うやつもいるぐらいだ。たしかに当時の少年と同年代でアビリターの奴は年下の奴らに比べて多いけど、そいつらの中にはもちろん何の能力もない奴もいる。最近じゃ能力者かどうかも無差別で誘拐するようなこともあるらしい。実際アビリターの能力を悪用しようと思えば洗脳なんかして簡単に出来るからそれが狙いだったり、単なる武器として売買されたりって話もある。お前もたぶんそれぐらいの年だろう。そんな奴らに捕まるぐらいなら俺たちと一緒に楽しく自由に生きようぜ」

真面目な顔に切り替えたギルバートは剛毅の目をまっすぐに見て、アビリターであると自覚したばかりの剛毅に、アビリターを含む現在の12歳以下の子供たち全てが置かれている状況を詳しく説明した。

剛毅もアビリター狩りが行われているなどの噂は街に捨てられていた古新聞などを見て知っていたが、アビリターとして自覚した後で改めて聞いてみると背筋がゾツとした。

自分が見ず知らずの組織に捕まって、ただの武器として一切の自由もなくただただ苦痛を受け続ける人生を一瞬でも想像してしまった剛毅は、すぐに「よろしくお願ひします」と言っ頭を下げた。

そして、この日から剛毅はギルバート達との生活が始まったのだ  
た。

## 002 Contaminated World (後書き)

はい、ということので早めの更新で第二話でございます。あと数話分は既に書きあげているので早めにUPすることが出来ます。

とりあえず今回は物語の進行に必要なキャラクター達を登場させました。

私がこのあとがきを書いている段階で既に6人ほどが読んで下さったようで、ありがたいかぎりでございます。

ぜひ感想などを書き残して行って下さい。

作者である私の励みになります(笑)

「離せ！離せつつつてんだろ！このくそつたれがア！！」

「ギル！くそがッ！なんだってんだよ、こいつら！離せ！はなせよ！このクソ野郎！」

剛毅を含むギルバート達5人は現在、工場跡にガスマスクを装着して乗り込んできた特殊部隊風の男たちによって、コンクリートがむき出しの冷たくて固い床に頬を押しつけられていた。

「悪いな、坊主。これも仕事なんだ」

それだけ言葉を発すると、男たちはそれぞれが懐から銃の形を模した注射器を取り出し、剛毅達それぞれの首筋に密着させると引き金をひいた。

プシュツと軽い音を立てて発射された針は、すぐに血中に薬を流し込み、剛毅達の意識を暗闇の底へと引きずり込んだ。

剛毅達が完全に眠りに落ちたのを確認した男たちはボストンバッグにいられて持つてきていた手錠や縄、轡、目隠しを取り出して剛毅達にかけていった。

完全に体を拘束された剛毅達は男たちに肩に担がれるようにして建物の外へと運ばれ、いつのまにか正面に来ていた黒塗りの護送車に放り込まれた。

護送車の頑丈な扉を2重のカギで嚴重にロックしたあとは、男たちも護送車の運転席側へと乗り込んで車を動かし始める。

低いエンジン音を響かせる護送車は工場跡にその音を大きく響かせ、すぐに工場跡から去っていった。

剛毅達が見ず知らずの特殊部隊風の男たちに連れ去られる少し前、ギルバート達との出会いから3年弱が過ぎた剛毅は皆とすっかり打ち解けるようになり、同年代ではあるが自分を拾ってくれたギルバートを兄貴分として慕い、時には親友として笑い合い、口調もどことなく似るほどになっていた。

そんな剛毅とギルバートは工場跡の中でギルバートとポーカーに興じている最中だった。

「よし！きたきた！ストレートフラッシュ！これならギルも敵わないだろ！」

「ふっふっふっ…。甘いな剛毅！見よ！我が必殺のロイヤルストレートフラッシュ！」

「ちょ…！ええ…！？」

「甘いな、剛毅。まだまだ修行が足りないな。それじゃ今晚のおかずはもらったぞ！」

「ちつくしよおおおおお」と悶える剛毅をしり目に、トイレへ行くと言って席を立ったギルバートは、部屋のソファアームに座って聖書を読んでいるティーダのそばを通る時にその腕を掴まれた。

「ど、どうした、ティーダ？用でもあるのか？」

「お前こそどうした？ギルバート、声が裏返っているぞ」

「そ、そんなことねえよ。悪いけどトイレに行きたいから離してく

れ

「…ふっ、そうか。引きとめて悪かったな。いつてくるといい」

そういつたティーダにギルバートは一安心し、次の瞬間にまさに目にもとまらぬ速さで動いたティーダの手によって、ギルバートの袖口が叩かれた。

バササツと音を立てて袖口から滑り落ちたのはランプのカードで、そのどれもが役にも立たないようなカードばかりだった。

「おっと、すまないギルバート。たまたま手が当たったようだ」

「うそつけえ！能力使ってたまたまって言い張るなんて白々しいぞ！」

「あー！ギルバート！いかさましやがったな！」

「グッ…ばれたか…！…ええい！騙されるお前が悪い！男ならそんなちつちえことにすんな！」

「それとこれとは話が別だろうがー！」

自身の能力である身体能力強化系の中の一つ『高速で行動出来る』という力を使ってギルバートの袖口を素早く叩いたティーダは、白々しく言葉を発した。

自分のいかさまをばらされたギルバートは思わず声を大きくしてティーダに突っ込むが、その声を聞いて、ギルバートの足元に散らばる数枚のカードを見た剛毅がギルバートに喰ってかかる。

つい数カ月前開花したばかりの自分の能力である異能系の『炎』を拳に纏った剛毅の一撃が、ギルバートの顔面に迫る。

剛毅と似た能力の持ち主のギルバートが、同じように手の平に炎を纏うとその一撃を危なげなく受け止めた。

「フツまだまだ青いな剛毅！いくら不意打ちとはいえこんな一撃では俺を倒すことはできないぞツ！？いてえ！？」

そのまま不敵な笑みを浮かべたギルバートだったが、ふいに後ろから飛んできて後頭部に来た衝撃によって体ごと前のめりになってけそつになる。

「部屋の中で！あんたらの能力使っなくなっていったるでしょうがぁ！」

同じく続けて飛んできた物体に剛毅も見事にクリーンヒットして、前景になったギルバートの背後が見れたのも一瞬で、すぐにやってきた痛みで顔を抑える。

「燃えたらどうすんのよ！このバカ共！」

片手に氷塊を浮かべたシェイラがこめかみに青筋を浮かべて剛毅とギルバートの方を睨んでいる。

以前2人がふざけて室内で能力を使ったときにあやうく火事になるところだったのを、自分の能力の氷で防いだシェイラとしては、2人がまた室内で能力を使ったことに対して怒っていた。

「いてて…。いや、シェイラこれにはわけがあっただな…」

「男なら言い訳するんじゃないわよ！あんたの足元にトランプが散らばってるってことはいかさまか何かしたんでしょ！それに剛毅も！部屋の中で無暗に能力使うんじゃないの！」

毛を逆立てて相手を威嚇する猫のような状態のシェイラに2人はそろって正座をさせられ、その太ももの上には即席で作られた氷が重石としてドシツと乗っている。

シェイラは怒ってもすぐに何事もなかったように振る舞うサバサバとした性格の持ち主だが、唯一の安眠できる場所を失いかねなかった前回のボヤ騒ぎで本気で怒り、3日3晩口を利かなくなったことを思い出したギルバートと剛毅はしまったなあと思いつながら黙って説教を受ける。

「だいたいあんた達はいつもいっつも……！」

途中で普段の生活の中のことなどに脱線しかけて約20分以上の長さになった説教は、今日は来るのが遅れると言っていたユリアの到着でようやく終わりをつけることになった。

「あれ？どうしたのー？二人とも氷を脚に乗つけて我慢大会？」

ドアを開けてふわふわとした空気とともに現れて天然ボケをかましたユリアに、怒っていたシェイラも毒気を抜かれたのか、「気をつけてよね！」と2人に言い切ったシェイラは自室へと戻っていった。来たばかりで何も分からないユリアはそれに？マークを浮かべていたが、まあいつかーと思いつく来ていたコートを脱いで、ポールハンガーにかけた。

今日は寒いなーと言いつつユリアは、そのままとととと部屋の中央部に置かれていたドラム缶を利用した簡易暖炉の前でしゃがみこんで暖を取り始めた。

燃料に使われるのは灯油や炭などといった上等なものではなく、全世界規模で人間の数が減少したことで廃業に追い込まれたホテルなどの残りものだった。

管理する者がいなくなった建物はそのまま放置され、中にあった家具類も全てそのまま残されているため、それらをギルバートがありがたく拝借してきたのだ。かつては綺麗に磨かれていた家具たちは、今では剛毅やギルバート達が暖を得るために解体されて燃料として部屋の片隅に置かれていた。

ちなみに工場跡にある全ての家具や遊具は、そうやって運び込まれたが解体されずに済んだ生き残りで、今では大事に使われている。そんな生き残りの中の一つである座り心地のとてもいいソファにドカッと腰をかけたギルバートは、慣れない正座によってしびれた足に力をかけないようにだら～と脱力していた。

剛毅の方は日本にいたところに正座などには既に慣れていたのでそのまま平気そうに立っている。

そして剛毅は一人で暖をとっているユリアのそばにしゃがみこむと、外の寒さで冷えたユリアの頬に手を添えた。

「あつたかいねえ。剛毅もギルバートも燃料いらすの人間ホツカイ口でうらやましいなあ」

能力で掌の温度を上げていた剛毅の手がユリアの頬を挟むと、ふにやつとユリアが笑って気持ちよさそうにする。

「私の能力なんて剛毅達の方がなんなのかっていうことぐらいしか分からないから全然実用的じゃないもーん」

「いやいや、そんなことないよ。ユリアが能力者だって言ってくれなきゃ俺は信じられなかったよ」

「おい剛毅！俺があの時言ったのは信じてなかったのかよ！」

「あ、あ…。ギルバートだからちょっとね…。いてっ！」

口を尖らせて拗ねたような口調で言ったユリアのフォローをしていると、ソファで脱力していたはずのギルバートがいつの間にか傍にいて剛毅の頭をパシんと叩いた。

その様子を見ていたユリアが「あははー」と笑ったので、剛毅は苦笑しながら再度口を開く。

「ところで今日はちょっと来るのが遅かったけど何かあったの？」

「あ、うーん。それなんだけどね…。実は前から言われていたんだけど、お父さんがもうここに来るなって…。それで言い合いになっちゃって遅くなっちゃった…」

「うーん、そうかあ…。やっぱり親からしたら心配だよなあ…」

「でも！剛毅やギル達が優しいのは私知ってるし、それを何度も説明したんだけど話も聞いてくれなくて…。それで喧嘩別れみたいな感じで飛び出してきたの…。」

「ユリア。そりやお父さんの方が正しいぞ。お父さんから見たら俺たちはこんな工場跡にいるんだから、そこらのゴロツキなんかと一緒だと考えるのも仕方ないだろう」

目じりにちよつと涙を浮かべながらユリアはそう言うが、ギルバートが横に首を振りながら少し悲しそうに言う。

「ごめんね。皆…」

「別に……。ユリアが謝る必要はない。ユリアは俺たちがそういう奴らじゃないってことを知っている。それだけで十分だ。それに俺たちはそういう扱いを受けたとしても何ら変わりはないんだ。それに……ユリアにはそんな悲しそうな顔は似合わない。だからユリアは笑っていてくれ」

ユリアがしゅんとした様子でぼつりとこぼすように言った言葉に対し、今まで部屋の一人掛けのソファに座って聖書を読んでいたティードがそれをぱたんと閉じると、ユリアのところまでやってきて頭に手を置いた。

「つか。あいかわらずキザだねえ、ティードは。この色男！」

「今まで何人口説いてきたんだよ！」

その様子を見ていたギルバートはなんとなく変になった空気を払拭しようとしてそれを茶化し、そして剛毅がそれに乗っかる。

「分からないな。それに出会いは俺からではなく向こうからやってくるものだしな」

それを綺麗にかわしたティードは、カウンターとばかりにちょっとした皮肉を返してくる。

「つけ！ああああイケメンっていうのは本当に羨ましい限りでございますよーだ。なあ剛毅！」

「え？俺に同意を求められても……。そうか、ギルは自分がイケメンじゃないのを気にしていたのか。かわいそうに……」



味は単調、量も少ない、しかし料金は高いという状態だ。

とうていお金などの持ちあわせがない者は街に残っているものを漁るか、なんとか野菜を自家栽培するぐらいしかない。

剛毅達は栽培をしようにも、店などに肝心の種がないためどうすることも出来ず、街を歩き回って食料を得る日々を送っている。

まさにジャングルでの一日が食料探しに追われるだけで終わるように、この廃れたコンクリートジャングルでの一日も食料探しに追われるだけで終わる。

そんな中でユリアを除く4人が日々の生活に苦しみを覚えて自殺をしないのは、幼少よりそんな厳しい日常が当たり前だったことと、仲間がいて笑あうことができるからだろう。

基本的に食料調達は男子である剛毅、ギルバート、ティードが行い、やることは限られているが家事をするのは基本的に女子であるシェイラの担当で、ユリアは来た時にその手伝いをするぐらいだ。

シェイラ達が食料調達に向かないのは、廃れた今の街では荒事に対する力がどうしても必要になるというのもあるが、最も大きい理由は単純に『女性』として襲われるからだ。

以前実際に襲われかけたシェイラは普段こそ強気なキャラを演じているが、実際は心の中で3人に対してとても感謝していたりする。

そして今日も一日が無事におわることに安心しつつ、5人は工場跡の中にあるそれぞれの部屋に向かう。

剛毅は5人の中で仲間になるのが最も遅かったため、工場の出口近くに設けられていた部屋をもらって寝ているのだが、たまたまその日は寝つきが悪く、浅い睡眠を繰り返していた。

そんなときに外からかすかにザツと地面を踏む音が聞こえてきて目が覚めた。

野良犬か何かを通ったのかなと寝惚ける頭で考えつつ、ふと外を見ようと思つて窓に近づこうとした瞬間にガラスが砕け、部屋の中に何か転がり込んできた。

いくつかの穴が空いた黒い筒状の物体が転がり込んできたのに気付いたが、それが何かを思い出す前にそれは目が眩むほどの光と、耳が聞こえなくなるほどの音を放つて爆発した。

まだ頭が微妙に寝惚けている上に、平衡感覚まで失つた剛毅の体はグラリと部屋の壁にぶつかり、そのままずると床に転がった。

すぐにガラスを破つて入ってきた男は剛毅が逃げられないように動きを拘束しつつ、部屋の外の廊下に引きずり出した。

剛毅はようやく戻ってきた視界であたりを見回すと、そこに同じように拘束されつつ廊下に引きずり出されてくる仲間たちの姿をとらえた。

一瞬何が何だか分からなかった剛毅だが、男たちに再度組み伏せられてコンクリートの床に頬を抑えつけられた剛毅は周りの男たちを見てようやく理解した。

こいつらが噂のアビリター狩りの奴らなんだろうと。

逃げようと動いてみるがしつかりと関節を抑えられていて身動きがとれず、炎を出そうとすると関節を折られるかと思うほど締め上げてるので集中力が続かずに能力が使えない。

まわりを見ても、同じような状況なのか苦悶めいた声が聞こえるだけで能力が使われる様子は無い。

「FUCK！なんだってんだテメーら！ああん！？離せよこのクソ野郎どもがア！」

そんな中でギルバートは唯一動かせる口を動かして相手を罵るが、

相手もプロらしくガスマスクの下にある表情を一切変えることなく再度締め上げる。

「ギル！」

苦痛の叫びを上げるギルバートに剛毅が声をかけるとギルバートは剛毅に気がついたのか、剛毅の方へと顔を向ける。

「剛毅！ああクソ！なんだってんだよこいつらはよお！離せこのクソつたれどもがア！」

しかし、いくらギルバートが叫ぼうと男はギルの関節を締め上げるだけだ。

「ギル！くそ！なんだってんだよ！離せ！はなせつつってんだろ！クソ野郎！」

剛毅がそうやって叫んでいると、工場の入り口から悠々と入ってきた隊長らしき男が銃の形をした注射器を構える。

「悪いな、坊主。これも仕事だ。怨むなら自分の運命を怨め。」

剛毅は首筋に薬を打ちこまれてすぐにやってきた眠気に必死に抗おうとしたが、やはり薬の力には敵わずガクリと全身の力を抜いて眠りに落ちたのだった。

### 003 A dangerous world (後書き)

さてさて、今回もストックのおかげで早めの投稿でございます。

熱い展開を書きたいけど、それはまだ先の展開なのです。残念…。  
もうしばらくお待ちください。

ところで何か感想などがあれば自由に書き込んで下さいね。

ただし、私はメンタルが弱い人です（キリッ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7462y/>

---

+ BURNING BLOOD +

2011年11月24日01時51分発行